

南曲『元宵鬧傳奇』と『水滸傳』

鶴田, 茜
九州大学大学院人文科学府修士課程修了

<https://doi.org/10.15017/4763191>

出版情報：中国文学論集. 50, pp.163-184, 2021-12-24. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

南曲『元宵鬧傳奇』と『水滸傳』

鶴田 茜

はじめに

南曲『元宵鬧傳奇』は、明代白話小説『水滸傳』に描かれる「盧俊義落草」の場面を中心に戯曲化したものである。その成立年代については先行研究でも言及されているが、内容についての議論は十分でない。これは『元宵鬧傳奇』だけに限った問題ではなく、南曲の一作品を取り上げてその内容について論じる研究自体が少ないのである。明代後期には小説と戯曲が互いに影響しあいながら発展していったことを考えると、「水滸物語」の真なる理解には小説と戯曲の双方からの研究が必要ではないだろうか。

本論は『元宵鬧傳奇』を精読し、『水滸傳』やその他の戯曲との比較を通して『元宵鬧傳奇』独自の創作部分を探り、作者がなぜその描写に至ったかを考察したものである。『元宵鬧傳奇』は『古本戯曲叢刊』第二集に収められている鄭振鐸旧蔵鈔本を底本とし、『水滸傳』は現存する中で最古の完本である容与堂本（二〇〇回本）を底本とする。なお、本論文において白話文献を引用する際には、可能な限り原文の字体に抛り、その他は新字体で統一した。

一 『元宵鬧傳奇』はどのような物語か

まず、『元宵鬧傳奇』の登場人物とあらすじを紹介する。『元宵鬧傳奇』（以下、『元宵鬧』と略する）の主な登場人物と南曲『元宵鬧傳奇』と『水滸傳』

あらずじは以下の通りである。一般的に南曲は一幕を「齣」や「出」と称するが、『元宵鬧』では「折」と称しているため、本論文もそれに倣う。また、その他の戯曲を扱う場合はその戯曲の底本の表記に合わせる。

主な登場人物（一）内は演じる役者を指す。生・旦は男女の主役、付・丑は道化役である）

〔生〕 盧俊義…豪傑で知られる北京大名府の大富豪。

〔旦〕 賈氏…盧俊義の妻。盧俊義が日々鍛錬に明け暮れて思いやりを見せないため、愛想を尽かしている。新しく雇われた李固と通じ合いたいと考え、召使に賄賂を贈らせている。

〔付〕 李固…もともと商人だったが元手をすつて北京大名府へ流れつく。食事を恵んでもらおうと盧俊義のもとを訪ねたところ、その計算の腕を買われて盧家の金勘定を任されることになった。

〔小生〕 燕青…盧俊義の養子で武術に優れている。盧俊義が李固を雇うことに反対していた。

〔外〕 宋江…梁山泊の首領。豪傑と称される盧俊義の話聞き、仲間になりたいと考える。

〔丑〕 張文遠…宋江の妾だった閻婆惜の間男。閻婆惜が殺された後、巻き添えになることを恐れ逃亡したところを李固に助けられた。現在は北京大名府の梁中書のもとで役人として働いており、梁中書の信頼を得ている。

あらずじ

【第一折／第三折】梁山泊の宋江たちは、亡くなった前首領の晁蓋を祀るため、高名な僧侶の大圓法師を呼ぶ。大圓法師は梁山泊に関連するいくつかの予言と盧俊義という豪傑の名を告げて去る。そこで宋江は軍師呉用に頼み、盧俊義を仲間にするために画策する。一方、北京大名府に住む富豪の盧俊義は李固という男を雇い、金の管理を任せる。

【第四折／第八折】盧俊義は夜になると鬼神の泣き声がするため眠れず、通りがかった占い師を呼ぶ。この占い師こそが梁山泊の軍師呉用であった。呉用は悪運を避けるためには東南へ千里（途中に梁山泊がある）逃げなくてはならないと占い、天命を詩に詠んだもの（各句の一字目を並べると「盧俊義反」となる）を壁に書かせる。盧俊義の妻賈氏は盧

俊義に対して愛想を尽かしており、盧俊義が東南へ出かけることを喜ぶが、密かに通じ合っている李固も一緒に出かけるを知って落胆する。梁山泊では盧俊義を捕らえるために多くの好漢たちに命令が下され、ついに盧俊義は捕らえられる。宋江は盧俊義のために宴を開き、呉用は李固に盧俊義が梁山泊の仲間になったと嘘を言って逃がす。

【第九折】第十二折】賈氏は一人で帰ってきた李固を迎えるが、李固は盧俊義が謀反を考えていると告発しに行こうとする。賈氏は謀反の罪に連座することを恐れ、相談があるからと夜寢室に来るように李固を誘う。二人は愛を誓いあい、盧俊義の財産を自分たちのものにしようと決める。燕青は李固が一人で帰ってきたことを怪しみ、朝になって李固を訪ねると、李固は賈氏のもとにいた。賈氏は李固を裏門から逃がし、告発のため役所に向かわせる。燕青は二人の姦通を知って罵り、盧俊義の謀反の証拠とされる壁の詩を削ろうとするが、賈氏に家を追い出されてしまう。

【第十三折】李固の知人である役人張文遠が告発に来た李固と会う。李固は盧俊義の財産と妻を自分のものにするよう便宜を図ってほしいと頼み、張文遠は快諾する。裁きの結果、李固が望んだ通りになり、李固は張文遠をお礼の宴に呼ぶ。

【第十四折】第十七折】盧俊義は好漢たちに帰郷の思いを語り、梁山泊を去って家に帰ろうとする。帰る途中で燕青と出会い、李固と賈氏のことを聞かされる。怒った盧俊義は燕青が止めるのも聞かず家に帰る。李固と賈氏は張文遠を呼び、宴を開く。帰ってきた盧俊義は宴の様子を見て賈氏を罵るが、張文遠たちに捕らえられてしまう。拷問の末、盧俊義は梁山泊の仲間になったと嘘の供述をさせられる。

【第十八折】第十九折】牢役人兼処刑人の蔡福は李固から五百両をもらい、盧俊義を殺すように頼まれる一方で、梁山泊の一味である戴宗からも一千両をもらい、盧俊義を守るように頼まれる。蔡福はもらった金を梁中書と張文遠に渡し、死刑から流刑に減刑してもらおうように考えた。盧俊義の流刑が決まると、李固は護送役人の張豹と李彪に賄賂を渡し、護送中に盧俊義を殺すように言いつける。盧俊義は林の中で殺されそうになるが、燕青に助けられる。

【第二十折】第二十一折】盧俊義は拷問の傷を癒すために宿で休んでいたところを役人に捕らえられる。燕青は盧

俊義の危機を梁山泊に知らせに行く途中で、梁山泊の好漢である戴宗と石秀に出会い、事情を話す。石秀は北京大名府へ潜入し、盧俊義の処刑に乱入して捕らえられる。梁中書は宋江たちを生け捕るため、盧俊義と石秀をすぐに殺さず、梁山泊の軍勢が二人を助けに来るのを待つことにする。

【第二十二折】李固の妻となった賈氏は、李固が自分の寢室に來ないことを不満に思う。召使の春英と李固が密通しているのではと疑い、春英を問い詰めようとするも、反対に春英に言い負かされてしまった。賈氏は、今度は張文遠と逢引したいと考えながら書齋へ行つたところに運よく張文遠が来る。張文遠は賈氏を口説き、抱こうとするが逃げられてしまう。そこへ賈氏の声を聞いて春英がやってくる。張文遠は春英と李固の仲を問い詰めながら春英の美しさに惹かれ、今度は春英を口説き始める。その様子を見てしまった賈氏は悲しみながら再び日を改めて張文遠と会うことを約束する。

【第二十三折】第二十五折】元宵節で街が賑わう中、賈氏は張文遠と会う。張文遠は酔いつぶれた李固を介抱していた春英も一緒に三人で寝ようと提案する。その後賈氏と春英は再び張文遠と会う約束をして彼を待つが、約束の時間になっても一向に現れず、不安になる。夜遅くにやって来た張文遠は、梁山泊の軍勢が攻めてきた時の兵の準備をしていたため遅くなったと弁解する。そこへ李固が帰ってきて三人の密通を知り、怒り出す。春英は賈氏に言われてやったことだと弁解する。張文遠は李固の身勝手さを罵り、梁中書に報告すると言つて出ていく。

【第二十六折】第二十七折】宋江たちは元宵節の賑わいに紛れて北京大名府に攻め入り、盧俊義たちを助け、張文遠と李固と賈氏を殺す。梁山泊に戻つた宋江は大圓法師の予言通り兄弟が百八人揃つたことを喜び、招安を待ち望む。そこへ戴宗が招安の勅命が下つたことを知らせ、宋江たちは皆で祝いの酒を飲んだ。

あらずじを見ると、張文遠の存在など大小の異同が見られるものの、大まかな話の流れは『水滸傳』とおおむね一致している。

では次に『元宵鬧』の作者について考えたい。『元宵鬧』の冒頭には「明吳江（現江蘇省蘇州市吳江区）李素甫位行撰」との題署がある。王国維『曲録』によると、李素甫は『元宵鬧』の他に『稻花初』・『落花風』・『再生蓮』・『賣愁村』

という四作を制作したようだが、いずれも散逸している。また、管見の限り、李素甫という名の人物について記載する資料の中に、『元宵鬧』の作者に該当する人物はいないようである。⁽²⁾

つまるところ李素甫の経歴は不明だが、『元宵鬧』第一折には、作者がこの戯曲を作った動機を唱った詞がある（唱者の脚色は明記されていないが、劇団長などであろうか）。この詞から李素甫が置かれていた環境を考えていきたい。

【西江月】意懶一腔愁緒、心馳滿載憂思。床頭金盡少相知。酷見炎涼滋味。閉室閒觀水滸、緣情草就傳奇。高明為我潤刪之。莫笑俚詞鄙句。（『元宵鬧』第一折）

【西江月】氣持ちが物憂く胸いっぱいの悲しみ、心は満ちた憂いに思いをはせる。持ち金は使い果たし、気心の知れた友は少ない。富貴と貧困の苦業をよく味わった。一人で部屋にこもり水滸を観て、感情のままに伝奇を書いた。南曲に詳しい方々は私のためにこれを加筆・削除してほしい。野卑な句をお笑いくださるな。

この詞の後半から、李素甫は水滸伝をもとにした戯曲またはその台本、あるいは既に小説として成立した『水滸傳』を見ることができ環境にあったことが分かる。さらに「高明為我……」の一文から、李素甫はこの作品を南曲に詳しい者に添削してもらいたがっている様子がうかがえる。つまり、李素甫の周りには南曲を作る者が他にもいたということである。

呉江の隸属する蘇州は、明代後期には崑曲の中心地であった。『義俠記』の作者沈璟や『翠屏山』の沈自晋は呉江の人であり、『水滸記』の許自昌は呉県の人であるように、現在伝わる水滸物の南曲の多くが呉江・呉県で製作されている。馮夢龍や袁無涯が万曆四十二（一六一四）年頃に『水滸傳』を刊行したのもこの地であり、蘇州が水滸伝と非常に密接な関わりのある地であったことが分かる。興味深いことに、呉江・呉県発の水滸物の南曲には、潘金蓮と西門慶、潘巧雲と裴如海、閻婆惜と張文遠、賈氏と李固というように、四作とも全て男女の不義密通が重要な場面として登場する。李素甫はこれらの南曲に影響を受けながら『元宵鬧』を制作した可能性がある。

また、『元宵鬧』の成立年代については、小松謙氏が「『寶劍記』と『水滸傳』——林冲物語の成立について」⁽³⁾の中で言及している。

『元宵鬧』において、かつて閻婆惜と密通していた張文遠が北京大名府に登場して盧俊義の妻賈氏と密通する

南曲『元宵鬧傳奇』と『水滸傳』

など、いずれもある程度の獨白色を出そうと試みてはいるものの、基本的に『水滸傳』の内容から大きくかけ離れることはないのである。これは、これらの作品が『水滸傳』の刊行後、その演劇化として制作されたことを意味する。(一四—一五頁)

小松氏はテキストが現存する明代以降の水滸物の南曲六作の中で、『寶劍記』を除く五作品は『水滸傳』刊行後に作られたものであると論じている。先掲した『元宵鬧』冒頭の詞の内容及び他の水滸物の南曲に影響を受けたと思われる作者の制作環境から見ても、『元宵鬧』は『水滸傳』成立より後に制作されたものと考えてよいだろう。

二 『元宵鬧傳奇』と『水滸傳』の比較

『元宵鬧』を『水滸傳』と比較してみると、『水滸傳』には存在しない『元宵鬧』独自の描写があることが分かる。例えば『元宵鬧』第三折で、宋江に盧俊義を落草させる計略について呉用が以下のように話す。

〔末〕不妨。我令先差時遷、潛入他家。夜作鬼泣神號、使他坐卧不寧。那時我扮一算命先生、憑咱三寸不爛之舌、管取說他來入夥。(『元宵鬧』第三折)

〔末(呉用)〕構いません。私は先に時遷をやつて彼(盧俊義)の家に忍び込ませ、夜に鬼神の泣き叫ぶまねをして、彼を落ち着かない氣持ちにさせます。その時私が占いの先生に扮して、この弁舌さわやかなままに、きつと彼を仲間に来るように説得します。

あらかじめ時遷に盧俊義の家へ侵入させ、盧俊義を不安にさせてから呉用が占いに行くと言っている。盧俊義はこの計略にまんまと引っ掛かってしまう。

〔生上〕……夜眠不穩起披襟、猛聽神鬼泣。未審是何因。卑人夜來睡卧不寧、披衣閱史、只聽得神號鬼哭、擲瓦拋磚、及至點燈照取、不惟聞其聲、抑且見其形、家室之中。大非吉兆、靜思卑人安居守志、非理不為。總有不吉、焉能禍及於我。(『元宵鬧』第四折)

〔生(盧俊義)登場する〕……夜眠るも落ち着かず起きて襟を広げると、ふいに鬼神が泣くのが聞こえた。何によるものかまだ分からない。私は夜中眠れず、服を羽織り史書を読んでいると、ふと聞こえるのは鬼神が泣く声、私は瓦や煉瓦を放り投げて、明かりを付ける

と、ただその声が聞こえるだけでなく、その上姿までもが部屋の中に見えた。まったく不吉であるが、私が志を守って落ち着いて生活していることを顧みても、道理に合わない。たとえ不吉なことがあるにしても、どうして私に災いを及ぼせるのか。

かくて不安に思い、古い師に見てもらおうとした所へ呉用が訪ねてくるという運びである。確かに、何事もなく暮らしている盧俊義が家の前をうろつく古い師に自身の運勢を占ってもらおうという『水滸傳』の展開に比べ、こちらは盧俊義の行動が自然であるように思われる。作者はより自然な展開になるよう新たな描写を加えたのだろう。また、『水滸傳』の梁山泊では、作戦は立てるものの、基本的に好漢たちが思い思いに戦い、騒ぎ、暴れている印象があるが、『元宵鬧』の梁山泊は軍規に厳しいという一面がある。第六折で宋江は呉用や戴宗にこのように語っている。

〔外〕……自令為始、如弟兄中不遵令者、梟首勿論。……今日為始、俱聽軍師約束、如有不遵、斬首勿論。……如臨點不到者斬、聞鼓不進者斬、聞金不退者斬、臨陣偷閑者斬、鼓噪喧嘩者斬、不遵約束者斬。〔元宵鬧〕第六折

〔外（宋江）〕……命令が始まってから、もし兄弟たちの中に命令に従わない者がいたら、問答無用でさらし首にせよ。……今日を始めとして、皆軍師の指示を聞き、もし従わなければ、問答無用で斬首せよ。……点呼の時にいないような者は斬り、鼓を聞いて進まない者は斬り、銅鑼を聞いて退かない者は斬り、陣へ行つて楽をする者は斬り、大声で騒ぐ者は斬り、指示に従わない者は斬る。

命令を守らない者は斬首・さらし首という非常に厳しい規則である。『水滸傳』第八十三回に、帰順した梁山泊軍の士官が役人を殺してしまつたため、やむなく宋江が士官を斬首するという場面があるが、『元宵鬧』のこの時の宋江の台詞と比べると違いは明らかである。

宋江哭道、「我自従上梁山泊以來、大小兄弟不曾壞了一個。今日一身入官、事不由我、當守法律。雖是你強氣未滅、使不的舊時性格。」〔水滸傳〕第八十三回

宋江は泣きながら言った。「私は梁山泊に上つてから、大小の兄弟たち一人もだめにしたことが無かつた。今わが身は官吏となり、(氣ままにする)ことは許されず、当然法律を守らなくてはならない。お前の不遜な氣性がまだ消えていないとしても、昔の性格を表してはいけない。」

南曲『元宵鬧傳奇』と『水滸傳』

招安を受ける前は一人の兄弟分も処刑したことが無かったが、宋に帰順してからは規律を守り、兄弟分だろうと斬首しなくてはならない。しかし先述したように、『元宵鬧』の梁山泊は帰順していないにも関わらず、招安を受けた後の官軍に近い性格なのである。

義兄弟間での相手の呼び方も特徴的で、『水滸傳』の宋江は好漢たちから「哥哥（あにき）」と呼ばれているが、『元宵鬧』では皆から「主帥（主將）」と呼ばれている。好漢たちは「主帥」である宋江の命令に従い、『水滸傳』では反対者もいた（第七十一回）招安にも皆が素直に賛成する。兄弟というよりは司令官と諸將といった関係だろう。

さて、「命令に従わない者は斬る」という描写がある通り、『元宵鬧』の梁山泊はよく指示を出す描写が見られる。ここで第六折の、呉用が好漢たちに盧俊義を捕らえるための作戦を話す場面を見てみよう。第六折では、呉用が李達・扈三娘・朱仝・呼延灼・柴進・花榮・石秀・孫二娘・張順に向けて命令の曲辞を歌う（ちなみにここでは北曲の曲牌が用いられている）。以下の【表一】の通り、曲辞の中には楽器・色・方角を指す単語が多く含まれ、作戦に具体性を持たせている。

【表一】（表中の原文は全て『元宵鬧』第六折より引用）。

好漢	呉用が指示を出している箇所
李達	<p>【油葫蘆】恁敢勇衝鋒隊做先行。統校刀手三百名。脚枚向深林可也潛藏隱。那其間橫巨斧專心等。我這里施砲把紅旂引。恁奮神威殺教他手不停。山頂上一棒鑼聲振即便可撥征。洄（原文は馬偏）馳往東方奔。誘來追好把牠抓來擒。</p> <p>【油葫蘆】勇氣に任せて突撃しろ。先頭部隊は先に行け。刀を持つ兵三百人を統率せよ。枚を嚙み木の奥で、伏兵して隠れるべし。そのあたりで大きな斧を構えてひたすらに待て。私の方では号砲を鳴らし赤い旗を引く。あなたの方では神威を奮わせるに任せて戦い、彼（盧俊義）の手を止めさせないようにしろ。山頂で銅鑼が一回鳴ったら、すぐに方向を変えて東の方へ走れ。追ってくるようおびき寄せたら、そこで彼を生け捕りにしてやるのだ。</p>
扈三娘	<p>【天下樂】旂轉青龍在震位屯。耳也須聽、畫角鳴。…止交鋒不許贏。數合中撤轉身。敗西南葉甲價（誤字か）曳兵。</p> <p>【天下樂】旗が青龍に変わったら東に駐屯せよ。画角（管楽器）が鳴るのをしっかり聞け。…鋒を交えるのを止めて勝ってはならない。數合戦い、身をひるがえして撤退せよ。西南へ敗走して、よろいかぶとを捨て、武器を引きずって逃げる。</p>

好漢

呉用が指示を出している箇所

朱全

【哪吒令】則這本鎮坤方險隘、左聯着庚辛。據地戸要道、右接着丙丁。：午中鋒逞己能、戰酣間似不勝。假慌張向壬癸上逃生。【突擊し】ただこの一隊は南西の險要の地を抑え、左聯は西につけよ。東南の要道を占拠し、右聯は南につけよ。：にわか突撃し、己の能力を見せびらかせ。戦いの真つただ中で、勝てぬふりをせよ。慌てるふりをして、北の方へ逃げろ。

呼延灼

【鶴踏枝】：不爭的轉拖鞭往巽地去潛形。【鶴踏枝】：戦わずに向きを変えて鉄鞭を引きずつて逃げ、東南へ行って潜め。

柴進

【勝胡蘆】東南列陣擋追軍。：見兌營旂動、且行且戰、誘彼入喪門。【勝胡蘆】東南に陣をしき、追手の盧俊義軍を遮れ。：西の軍營の旗が動いたら、行って戦い、相手を死の門へ誘いこめ。

花榮

【寄生草】你可袍穿素、甲挂銀。：俺這里偷閃射他神駿。他那里潰回東北、不擇路破平。【寄生草】おぬしは喪服の上着を着て、銀の甲冑をかけるのだ。：私の方では隙をついて盧俊義の駿馬を射倒す。彼の方では軍が崩れて東北へ引き返すが、平らな道は選ばぬだろう。

石秀

【勝胡蘆】：殺得他垂眉喪氣難前進。【勝胡蘆】：盧俊義ががつくりと意気消沈して前進できぬように戦いなさい。

孫二娘

【寄生草】：傍巉岩取次已黄昏近、燒火炬連雲陣。【寄生草】：峻険な岩山に沿って日暮れ近くに、たいまつに火をつけ雲が連なるかのようにたくさん置け。

張順

【么篇（寄生草）】：恁乍殷勤半渡通名姓。他計窮仗劍來相併。你連舟共瀾闊波心。生擒善颯毋傷損。【么篇（寄生草）】：おぬしは初めはねんごろな様子で（川の）半分まで渡したところで姓名を名乗れ。盧俊義は窮し剣をもつて戦いに来る。お前は舟もろとも沈めて波の中で戦い、生け捕つたら、よくもてなして傷つけてはならない。

呉用が盧俊義を捕らえるための作戦を各好漢に指示する場面は、『水滸傳』には存在せず、『元宵鬧』独自の創作部分である。加えて第七折では、各好漢たちが盧俊義と戦う場面にそれぞれ曲辞が挿入される。二折にわたって好漢たちの活躍を描く見せ場のようだ。

一方、第二十六折の元宵節中の戦いの場面を見てみると、第六・七折とは描き方が大きく異なることが分かる。

〔外衆上〕

【北上小樓】俺這裡更衣變服類編民。懷揣着短械陷堅城。只見那星橋串月大樹燒銀。層樓上燦爛、叠閣内光明。又只見笑咳咳、又只見笑咳咳、一團嬌掩映香肩並。挨挨擠擠黔黎似那蜂屯。俺這里奮心兒俺這里奮心兒隨

南曲『元宵鬧傳奇』と『水滸傳』

行擁入琼林境。〔外〕一個個守口要如瓶。〔下〕

……〔衆各出器械殺介〕〔外〕先到留守司去。〔衆應介〕已到留守司門前了。〔外〕與我殺進去。〔元宵鬧〕第二十六折

〔外（宋江）衆（好漢たち）が登場〕

〔北上小樓〕私はここで衣服を変えて民に紛れ込む。懐には堅固な城を落とすための武器をしまっている。ふと見れば、七夕のカササギの橋は月まで渡り、そびえ立つ銀灯（のようだ）。高い楼閣の上はきらきらと光り輝き、重なった楼閣の内にはまばゆい光。また見てはハハハと大いに笑い、また見てはハハハと大いに笑い、一まとまりの美しい人々は引き立てあつて、良い香りの人々が肩を並べている。押し合いへし合い、民は蜂が集まる様子のように。私の方では心をふるい、私の方では心をふるい、人々について行つて王家の庭園を取り囲もう。〔外〕各自瓶のように固く口を慎め。〔退場〕

……〔衆各々武器を出して戦うしぐさ〕〔外〕先に留守司へ行け。〔衆応じるしぐさ〕留守司の門前に着いた。〔外〕私と共に突撃せよ。宋江以外に特定の好漢の名は無く、「衆」でまとめられている。また、作戦を各好漢に伝えることもなく、ただ各々が民のふりをして北京大名府に入り、武器をもつて暴れていることが台詞で書かれているのみである。曲辞は大部分が元宵節の賑やかで華やかな様子を唱うもので、戦いの内容は二の次である。『水滸傳』をもとにした戯曲で『元宵鬧』という題を見るに、この物語は元宵節の中で好漢たちが暴れる場面こそが重要な作品でありそうなものが、実際にはこの場面が題に使われるほど重要な場面には見えない。これはいったいどういふことだろうか。

続く第二十七折にも不可解な描写がある。第二十七折では宋江が牢から救い出された盧俊義たちと梁山泊に帰り、次のように語る。

〔外〕我等弟兄一百八人、上應三十六天罡、下應七十二地煞。符合大圓法師、六六・八九之數、事豈偶然。〔元宵鬧〕第二十七折

〔外（宋江）〕われら兄弟百八人、上は三十六の天罡星に応じ、下は七十二の地煞星に応ず。大圓法師（の予言）の六六・八九の數とぴったり合うことがどうして偶然だろうか。

ここですでに百八人の好漢が揃ったことになっているのだが、『元宵鬧』では、これ以前に蔡福や索超らの好漢が

登場するものの、宋江の仲間になるという描写は存在せず、特に索超は梁中書に信頼を置かれている武将として描かれるのみなのである。いつの間にか仲間になつて来たことになつてゐるわけである。そして、その直後に、天子が招安の詔を出したという知らせが入り、物語は終了する。あまりにも急な展開である。このような終盤にかけての好漢たちの描写の薄さや急展開は何を表しているのだろうか。

ここで、さかのぼつて第一折にある『元宵鬧』のあらすじを唱つた詞を見てみよう。

【滿庭芳】宋室衰微、皇綱凌替、梁山潛集豪英。軍師學究、星說玉麒麟。李固妄圖妾産、嗔規諫怒逐燕青。盧俊義、苦辭衆俠、遇僕訴衷情。招成戍遠逃生、排難二進司門。宋公明患疽（原文は「やまいだれに毒」だが、辞書に記載のない字のため誤字と思われる。ここでは『水滸傳』の表記に鑑みて「疽」とする）兵解東平。賈氏含酸怨偶、張文遠兼御春英。元宵鬧、報冤劫獄、詔取赴神京。（『元宵鬧』第一折）

【滿庭芳】宋室は衰え、朝廷の秩序法規は虐げられ、梁山に密かに豪傑たちが集まる。軍師呉學究は、玉麒麟（盧俊義）に星を説く。李固は財産を自分のものにししようとみだりに企て、正しく諫められたことに不満を持ち、怒つて燕青を追い出す。盧俊義は、懸命に豪傑たちの勧誘を断り、使用人（燕青）に會つて真情を訴える。自白して流刑となるが、逃げて命拾ひし、困難を退け、好漢らは二手に分かれて官署の門へ進む。宋公明は疽（皮膚病）を患うも、（梁山泊の兵士らが）東平（山東）を救う。賈氏は嫉妬して相手（李固）を恨み、張文遠は合せて春英をも御す。元宵節の中戦い、恨みに報いて牢獄を急襲し、天子の命令で招かれ都へ赴く。

傍線部「宋公明患疽、兵解東平」の句は、『水滸傳』の、宋江が盧俊義を救うために北京を攻めるも、官軍が梁山泊に迫つてゐることを知つて退却した後、病を得て治癒し、山東の包圍を突破して、再度北京へ出兵する場面（第六十三回～六十六回）を踏まえたものと考えられる。また、『元宵鬧』第三折の大圓法師の予言にも宋江の病の話が登場する。

〔付〕吓、列位將軍、皆忠良義勇。暫離龍潭、待完六六・八九之數。始招安、悉為皇家梁棟、其中壽限。各有不齊、難以枚舉。晁天王為義俠而亡、上蒼憐憫、不入鬼道、浮游塵世。今年仲冬、與宋將軍夢中相會。但將軍有灾、名醫救治無妨。（『元宵鬧』第三折）

〔付（大圓法師）〕ああ、將軍各位は、皆誠実公正で義勇の人です。しばし危険な場所を離れ、六六（三十六）・八九（七十二）の數になるまで待ちなさい。招安が始まれば、ことごとくが国家の重鎮となりますが、その幸せには限りがあります。各々が揃わなくなるこ

と、数えるのが難しいほどです。晁天王が義侠のために亡くなったことを、天が憐れみ、餓鬼道には入らず、浮世をさまよっています。今年の十一月、宋將軍と夢の中でお会いしよう。ただ將軍は災いに遭いますが、名医が治すので問題ありません。

ここでは宋江が晁蓋の靈に会うということや、名医が宋江の病を治すことが描写されている。これは、宋江が夢の中で晁蓋の靈に会ったのち痘を患い、名医安道全に治してもらう話に拠っているのだろう。しかし、『元宵鬧』本編では、宋江が一度梁山泊に退却することもないし、宋江が晁蓋の靈に会うことも、痘を患い、それを安道全に治してもらおうというエピソードも無い。『水滸傳』第六十三〜六十五回の、この辺りの話を省略しても「盧俊義落草」譚は十分に成り立つが、『元宵鬧』序盤で繰り返し言及されているところを見るに、本来は本編にも描く予定だったのだろう。

そもそも南曲は四十前後の齣で構成される長編が一般的である。しかし『元宵鬧』は全二十七折と非常に短く、加えて肝心の元宵節の中で戦う場面は第二十六折のみで、展開や描写も前半部と比べて丁寧とは言い難い。作者はもともと宋江が晁蓋の靈に会った後に痘を患い、張順が医師安道全を連れてくるという『水滸傳』第六十五回の内容を含めた元宵節の戦いを書くつもりだったが、事情があつて断念し、『水滸傳』よりもかなり簡略化した第二十六・二十七折をもつて強引に完結させたものと考えられる。

ちなみに、第一節で『元宵鬧』の成立年代について述べたが、『水滸傳』成書化のなかで比較的后期に誕生したと考えられる第六十五回の内容を『元宵鬧』本編に入れるつもりであったとすれば、やはり『元宵鬧』は『水滸傳』刊行以降に制作されたものと考えられよう。

三 『元宵鬧傳奇』における張文遠

『元宵鬧』において最大の特徴となるのが張文遠の存在である。『元宵鬧』における張文遠の登場については、小松謙氏が「寶劍記」と『水滸傳』——林冲物語の成立について（前出）の中で、作者が独自色を出そうとしている箇所であると指摘している。張文遠は張三郎と呼ばれ、『水滸傳』では閻婆惜の間男として登場するが、第三十六回を

最後に登場しなくなる人物である。小松氏の指摘通り、『元宵鬧』での張文遠の再登場は作者が独自に創作した箇所であることは間違いないであろう。では『元宵鬧』の張文遠はどのような人物として描写されているのかを詳しく見ていこう。張文遠は『元宵鬧』第十三折から登場する。

〔丑上〕……人無橫財不富、馬無夜草不肥。我張文遠、為何道此句、只因閻婆惜之事。①痛恨宋江、謀配遠方、雪其心恨、不意江州造反、劫上梁山。買馬屯兵攻城掠地、將為大擧。②如今人人說一張三郎被個閻婆惜活捉殺哉、那里有這等事。我恐被宋江謀害、逃奔他方、避入燕京。正無依賴、幸遇盧員外家主管李固。念皆流派、一見如親、惠我錢財、得充留守司虞侯。梁爺喜我機巧、十分聽信。此皆李固扶持、豈可不報。〔元宵鬧』第十三折

〔丑（張文遠）登場〕……人は悪銭無しには富まず、馬は夜食無しには肥えない。私は張文遠、なぜこの二句を唱えたかというところ、ただ閻婆惜のことのためである。①宋江をひどく恨み、謀って遠方へ流刑にし、恨みを晴らしたが、まさか江州で謀反を起こし、かえって梁山に上るとは思わなかった。（宋江は）馬を買い兵を駐屯させ、城を攻め土地をかすめ取り、大擧をなそうとしている。②今、人々は「張三郎は閻婆惜に生け捕りにされて殺された」と話しているが、どうしてそんなことがあるのか。私は宋江に謀り殺されるのを恐れて、他の地へ逃げ、北京大名府に隠れ入った。ちょうど頼りにする者もいなかったところ、幸いにも盧員外の家番頭の李固に出会った。二人とも同胞であることを思い、一度会っただけで旧知のように親しくなった。（李固は）私に金品を恵み、（私は）留守司の虞侯（官僚が雇う側近）に就くことができた。梁中書は私の当意即妙さを喜び、十分に信頼してくださっている。これらは全て李固のおかげである。どうして報いずいられようか。

張文遠が自身の境遇について語る場面である。特に注目する点として二か所に線を引いているが、この傍線部①・②については後述するとして、まずは『元宵鬧』における張文遠の役割を見ていこう。

（一）張文遠の役割

張文遠は北京大名府で留守司の虞侯になり、梁中書に気に入られていると述べている。実際に、張文遠は李固に有利な判決を出すよう梁中書に進言し（第十三折）、捕らえられた盧俊義を拷問にかけ（第十七折）、金をもらって盧俊

南曲『元宵鬧傳奇』と『水滸傳』

義を流刑にする(第十八折)など、裁判に深く関わっている。『水滸傳』では張文遠と同じような役割を持つ人物として張孔目という人物が登場する。張孔目は、盧俊義を拷問にかけて嘘の供述をさせ、賄賂を受けて盧俊義を流刑にするよう梁中書に助言する(いづれも第六十二回)といった、『元宵鬧』の張文遠とほぼ同じ行動をとる人物である。『元宵鬧』では、李固が盧俊義の財産と賈氏を手に入れるための裁判の場面が入るため、裁判に関わる者の中に李固と懇意な人物が必要となり、李固と知り合いであるという設定の張文遠に張孔目の役割を与えたのだろう。

また、第二十四折では、梁中書から、梁山泊の好漢たちが北京大名府にやって来た時の対応を相談され、兵を用意している。これは『水滸傳』で、梁中書が軍の司令官である聞達に相談している場面(第六十六回)と対応していると考えられる。張文遠は軍司令官の役割も兼ねているようだ。

(二) 張文遠と宋江

傍線部①で張文遠は閻婆惜を殺した宋江を恨み、策略によって流刑に処したと語っているが、『水滸傳』では異なる。【表二】に、『水滸傳』で宋江が閻婆惜を殺した後の張文遠の動きを描いた部分を引用する。

【表二】

22	回
<p>那張文遠上廳來稟道、「雖然如此、見有刀子是宋江的壓衣刀。可以去拿宋江來對問、便有下落。」知縣吃他三回五次來稟、遮掩不住、只得差人去宋江下處捉拿。宋江已自在逃去了。……</p> <p>かの張文遠は役所へ行き、申し上げることに、「このようであるとはいえ、今ここにある刀は宋江の懐刀です。宋江を捕らえに行つて尋問できれば、決着がありますよ。」知県は彼が何度も来て上申するのでかばいきれず、人をやつて宋江の下宿へ捕らえに行かせざるを得なかったが、宋江はすでに彼方へと逃亡していた。……</p>	<p>本文・訳</p>

張文遠又稟道、「犯人宋江逃去、他父親宋太公並兄弟宋清見在宋家村居住。可以勾追到官、實跟比捕、跟尋宋江到官理問。……張文遠がまたも申し上げて言うには、「彼の父親の宋太公および弟の宋清は今宋家村に住んでいます。彼らを逮捕して役所に連れて行き、期限を決めて勾留し、宋江を追跡して役所に連れてきて尋問しましょう。」……

怎當這張文遠立文案、唆使閻婆上廳、只管來告。……

（知県が宋江をかばおうとしても）いかんせんこの張文遠は力を尽くして書類を作成し、閻婆をけしかけて役所に行かせ、ひたすら訴えさせているのでどうしようもない。……

那張三又挑唆閻婆去廳上披頭散髮來告道、……

かの張三郎はまた閻婆をそのかして役所に行かせ、（閻婆が）髪を振り乱し訴えて言うには、……

那張三又上廳來替他稟道、「相公不與他行移拿人時、這閻婆上司去告狀、倒是利害。詳議得本縣有弊、倘或來提問時、小吏難去回話。」知縣情知有理、只得押了一紙公文。……

かの張三郎もまた役所へ行って彼女（閻婆）のために報告して言うには、「知県様が彼女（閻婆）のために逮捕状を出さなければ、この閻婆が上官に言いつけに行き、かえって大変です。審議でこの県は問題があるとされて、もし取り調べに来たら、わたたくしめは答えようがございません。」知県は十分に道理があると考え、ただ公文書に署名するほかなかった。

縣裡有那一等和宋江好的相交之人、都替宋江去張三處說開。那張三也耐不過衆人面皮、因此也只得罷了。

県では宋江と良い付き合いがあった人たちが、皆宋江のために張三郎のもとへ行き、とりなした。かの張三郎も皆の面目を潰しきれず、そのため訴えもやむなくやめてしまった。

那時閻婆已身故了半年、這張三又沒了粉頭、不來做甚冤家。

その時間婆はすでに亡くなって半年、この張三郎も女（閻婆惜）を失ってしまつて、（宋江に対する）何のかたきというわけでもなくなつた。

『水滸傳』の張文遠は、第二十二回にて、宋江が閻婆惜を殺して逃亡した後、何度も宋江を捕らえるよう訴えるが、最後は周りからとりなされて訴えを諦める。その後、宋江は逃亡して清風山で好漢と行動を共にするが、鄆城に残してきた父が死んだという偽りの知らせを受け取って急ぎ帰郷し、第三十六回で取り手に捕まり、役所へ連れていかれる。そして江州の監獄へ流刑という判決が下されるのであるが、この時張文遠は、憎き宋江が目の前に引きずって来られたにも関わらず、もはや興味も失つたかのように、何もしなかったのである。このような『水滸傳』の展開には違和感を禁じ得ない。張文遠は宋江をかばおうとする知県に対してあの手この手で何度も訴えを出し、ついには宋江の実家まで搜索させたほどであるのに、それほど憎んでいた宋江が捕まっても何もしないということ

があるだろうか。

現存する水滸伝をもとにした南曲の中に、もう一つ張文遠が登場する作品がある。明の許自昌（二五七八—一六二三）による『水滸記』だ。『水滸記』は宋江を主人公とし、途中に生辰綱強奪や王倫殺害を盛り込みながら、宋江が閻婆惜（『水滸記』では閻婆息と表記されている）を殺し、梁山泊へ仲間入りするまでを描いた伝奇である。ただし、『水滸記』の宋江は、閻婆惜を殺した後逃亡し、戴宗を頼って江州に行くという話になっており、『水滸傳』・『元宵鬧』のように、閻婆惜を殺した罪で流刑になることはない。『水滸記』の張文遠（『水滸記』では張行三という名である）も『水滸傳』と同じく張三郎と呼ばれ、閻婆惜の間男である。張文遠が閻婆惜の死を知った場面を見てみよう。なお、『水滸記』は『六十種曲』を底本とした。

〔浄上〕……閻媽媽、你們爲甚麼在此叫屈。〔老旦〕張三相公、老身正要見你。那宋江昨夜竟把我的女兒殺了。……〔浄〕有這的異事。

【碧牡丹】聞訃堪驚駭、淚滿腮。哎、宋江宋江、親手將人刃、三尺在。閻媽媽、不怕他走到天上去、待我與你拿狀紙、進去稟縣主老爺。……

〔浄〕閻媽媽、你不消進來得。待我與你拿進去、就差人去拿便是。怒從心上起、惡向膽邊生。（『水滸記』第二十齣「鼠牙」）

〔浄（張行三）登場〕……聞おばさん、あなたたちはどうしてここで不平不満を叫んでいるのですか。（老旦（閻婆））張三の若様、このばばはちょうどあなたに会いたかったのよ。あの宋江が昨日の夜あろうことかわたしの娘を殺したんだ。……〔浄〕こんな事件があったのか。

【碧牡丹】訃報にとても驚き、涙はあこの下まであふれる。おお、宋江よ宋江よ、三尺の刀で、手ずから人を切り殺すとは。聞おばさん、彼が天まで逃げていくことを恐れないで、私があなたのために訴状を持って行き、知事様に申し上げましょう。……

〔浄〕聞おばさん、あなたは行かなくてもよい。私があなたのために（訴状を）持っていき、人をやって捕まえに行かせるのがよい。怒りが心から湧き上がり、憎しみが腹にたまるばかりだ。

閻婆から閻婆惜の死を聞かされた張文遠は、怒り悲しみ、下手人の宋江を捕らえたと閻婆に語る。しかし、続く

第二十五齣を見ると、全く異なることを話している。

〔淨上〕……我張三郎財色上安命的。閻婆息在日、我愛他的色、如今死了、眞個與宋公公有甚麼不共之仇不成。不免乘機去賺他的銀子用用、卻不是好。〔水滸記〕第二十五齣〔分飛〕

〔淨（張行三）登場〕……私張三郎は金と女について運命に任せている。閻婆息（惜）が生きていた時、私は彼女の美しい容貌を愛していたが、今死んでしまつて、本当に宋江と不倶戴天の敵になつて何になるというんだ。この機に乗じて彼の銀子をだましてちよつと使うにこしたことはない、かえつて良かったじゃないか。

このように早々と宋江を捕らえることをやめてしまつてゐるのだ。「閻婆惜が死んでしまつたから宋江と仇になることもない」という理由は、『水滸傳』の第三十六回と同じものである。これらに対し、『元宵鬧』の宋江を謀つて流刑にする張文遠という設定は、単に終盤で宋江が張文遠を殺す理由付けのためのものかもしれないが、『水滸傳』や『水滸記』で描写されるあつさりと訴えをやめてしまふ張文遠と比べると、より筋が通つた改変であると言えるだろう。

（三）生け捕りにされる張文遠

傍線部②の「張文遠は人々から閻婆惜に生け捕りにされたと噂されている」という記述は最も不可解である。『元宵鬧』にはもちろん、原型となつたであろう『水滸傳』にもこのような描写はない。この記述は一体何なのか。

この描写には『水滸記』が深く関わつてゐるものと思われる。『水滸記』の第三十一齣「冥感」は殺されて霊となつた閻婆惜が登場し、張文遠を連れていくという話で、『元宵鬧』第十三折の張文遠の台詞にある「閻婆惜に生け捕りにされる」という言葉と非常に近い内容である。

〔小旦扮鬼魂上〕……奴家閻婆息、自遭狂且毒手、已從鬼籙潛身。只是柳性未寒、雲情尚在。哎張三郎、張三郎、你此後祇就畫圖、識春風之面。我今日且攜環珮、歸月下之魂。不免乘黃昏人靜、他那裏走一遭則個……

〔小旦〕三郎、奴家看起來、我既捨不得、你又活不得我、不如我與你結一個鴛鴦塚、完了兩人的夙願罷。〔淨驚介〕這個怎麼使得。〔小旦〕我也顧不得、只是扯了你同去便是。〔小旦扯淨、淨掙不脱介〕〔水滸記〕第三十一齣「冥

感)

〔小旦(閻婆息)が靈魂に扮して登場〕……わたし閻婆息(惜)は、旦那様(宋江)の毒手にかかり、すでに死んで鬼籍に入っています。ただ放埒な性格だけは冷めやらず、道ならぬ恋心もなお抱いております。ああ、張三郎、張三郎、あなたはこれから先ただ遺影によって、(私の)美しい姿に会うことができるだけなのね。わたしは今日しばし玉飾りを身に着け、月の下で元の姿に戻りました。日暮れの人の静けさに乗じて、彼のもとへちよつと行くまでのことよ。……〔小旦〕三郎、わたしが見ましたところ、わたしがあなたを捨てられない以上、あなたは私を生き返らせてやりたくないことだし、わたしとあなたが一つの夫婦墓で結ばれて、二人の昔からの願いをかなえるに越したことはないわ。(浄(張行三)驚くしぐさ) これにはどう同意できようか。〔小旦〕わたしもなりふり構ってられないわ、ただあなたを引つ張って共に行くだけよ。〔小旦が浄を引つ張る、浄はもがき抜け出せないしぐさ〕

この『水滸記』は現代でも演じられるほど有名な作品であり、『水滸記・活捉』という崑曲も存在するが、明代後期に崑曲の中心地であった蘇州では、張文遠が閻婆惜の靈魂に「活捉」されるという話が当時から人々に親しまれていたのではないかと考えられる。そして、同じく蘇州の人であった『元宵鬧』の作者は、読者や観客が「活捉」の話を知っていたからこそ、あえて本編とは関係ない「活捉」を台詞の中に入れ、「人々が噂している」と張文遠に語らせたのかもしれない。

南曲の制作の際に、同じ故事を素材とする著名な小説や歌物語から影響を受けるということは十分にあり得ることであり、例えば大賀晶子氏の「南曲『玉簪記』について——雑劇『女真觀』及び小説『張于湖傳』との關係から——」によれば、南曲『玉簪記』第二十七齣の曲辞で旦の妙常が妊娠したことを語るが、それ以降妙常の妊娠には触れられずに物語が進むことについて、これは短編白話小説「張于湖傳」または「張于湖傳」のもとになった話、さらに言えば雑劇『女真觀』と共通の歌物語テキストを原拠としていると考えられるという。『玉簪記』と同じように、『元宵鬧』も『水滸記』がもとにした話または『水滸記』自体に影響を受けて「張文遠が閻婆惜に生け捕りにされる」という台詞を入れたのではないだろうか。

(四) 第二十二折以降の張文遠

『元宵鬧』の張文遠と『水滸記』の張文遠の共通点はもう一つある。どちらも人の妻を口説く点である。まず、『元宵鬧』第二十二折では、張文遠は李固の妻となつた賈氏を口説きだす。賈氏に逃げられると今度は賈氏の召使である春英を口説き始めるのだからその節操のなさには驚かされる。一方の『水滸記』第二十五・二十九齣では、閻婆惜が殺された後、張行三(張文遠)は宋江の家に行つたときに宋江の妻孟氏の美しさに惹かれ口説き始める。小説『水滸傳』でも張文遠は軽薄な男であるが、戯曲となつてさらに浮気的な面が強調されるようになったようだ。

しかし、『元宵鬧』の張文遠が賈氏を口説く展開については、いくらかの違和感を感じざるを得ない。

まず、『元宵鬧』の張文遠が賈氏や春英と初めて会う第十六折を見てみよう。第十六折で、張文遠は李固から宴に呼ばれる。

〔丑〕李兄、方才這美艷者、是宅上何人。〔付〕是房下。〔丑〕李兄向一相處、聞你尚未有室。〔付〕張兄、你就忘記了。〔丑〕吓、莫非就是盧俊義渾家賈氏。〔付〕却不道怎麼。〔丑〕天災的、得了他若大家財、又有此麗人。可該謝我。……〔丑〕這又是何人。〔付〕是我家小婢春英。〔丑〕一發妙。想也把你用過了。〔付〕休得取笑。(『元宵鬧』第十六折)

〔丑(張文遠)〕李兄さん、今さっきのこの美しくあでやかな人は、この家の誰だ。〔付(李固)〕こちらは私の妻だ。〔丑〕李兄さんは以前会った時、まだ妻はいないと聞いたぞ。〔付〕張兄さん、君は忘れたのか。〔丑〕えつ、まさかこれが盧俊義の妻の賈氏ではあるまい。〔付〕かえつてそう思わないのはどうしてなんだ。〔丑〕彼(盧俊義)のたくさんの財産を得て、またこの麗しい人を手に入れるとは天災だな。私に感謝するべきだ。……〔丑〕これまた誰だ。〔付〕我が家の召使の春英だ。〔丑〕なんとすばらしい。彼女もお前とできたがつてるんじゃないのか。〔付〕からかうんじゃない。

賈氏のことを「這美艷者」・「此麗人」と言つてはいるが、一目ぼれのような描写はない。春英についても「想也把你用過了」と李固をからかっている。張文遠は第十三折で「此皆李固扶持、豈可不報(これらは全て李固のおかげである、どうして報いずいられようか)」と言つており、恩人である李固の妻や召使を口説くなどという発想には至らないのではないだろうか。しかし、次に登場する第二十二折では、賈氏に対して突然このように話しだす。

〔丑〕……我自從見了尊嫂之後、日夜思念。今日無人在此、和你霎時雲雨。〔元宵鬧〕第二十二折)

〔丑(張文遠)……私はお義姉さんとお会いしてから、昼も夜も思っています。今日ここには人がいませんので、あなたとしばしば結ばれましょう。〕

こう語りかけながら賈氏に抱きつくが、あまりに性急すぎるため逃げられてしまう。その後春英に会うと次のような態度である。

〔丑指介〕

【猫兒墜】看他丰儀綽約、今我五魂飛。〔丑回看介〕〔元宵鬧〕第二十二折)

〔丑(張文遠) 指すしぐさ〕

【猫兒墜】彼女を見ればなよやかで美しいさま、私の五つの魂は飛んで行ってしまいそうだ。〔丑振り向いて見るしぐさ〕

唱った後に「丑回看介」とト書きがあるので、後ろを向いて独白として春英の美貌に惚れ惚れしていると唱うのだらう。このように、第十三折では李固を恩人と語っていたはずの張文遠が、第二十二折で急に李固の妻たちを口説き始め、浮気的な面を現すようになるのは、やや整合性に欠けた展開に思われる。

次に、第二十二折以降の李固は、毎日友達と飲み歩き女遊びに明け暮れて、賈氏の寢室には寄り付きもしなくなり、別の人間になってしまったかのようである。

さらに、第二十三折・第二十五折では、李固・賈氏・張文遠・春英の全員が難解な韻文の曲を唱い続けるが、春英は物語前半部では、「啐、没用的東西、准擬今宵入繡幃(ちえつ、役に立たないやつめ、今夜女性の部屋のとばり(賈氏の寢室)に入る準備をしないよ)」(第九折)や、「教你少說些他就罷了、如今看你怎麼樣。快走出去。省得孺人又出來(お前が控えめに話していたら彼(李固)は深く追求しなかつたらうに、今のお前ときたらどうかしら。早く出て行って。奥様がまた来るわよ)」(第十二折)などのように、やや俗っぽい白話的な台詞を話す人物であり、曲を唱うことがあつても難解な韻文というほどではない。それが、第二十三・二十五折の春英は急に雅やかに曲を唱い出すのである。

以上のように、第二十二折以降の登場人物の性格・作風が、それ以前とは異なるように感じられるのであるが、これはいったいどういふことだらうか。

或いは、第二十二折以降には李素甫以外の人物によつて手を入れられたと考えるとどうだろうか。『元宵鬧』第一折にあるように、李素甫はこの作品を南曲に詳しい者に添削してもらいたいと考えていた。そして本論の第二節で指摘したように、『元宵鬧』は本来長編作品のはずだったものを途中で強引に完結させた可能性がある。李素甫が未完もしくは途中で強引に完結させた本来の『元宵鬧』が、李素甫の手を離れ、明代蘇州の複数の読書人たちの間で加筆・修正されていったと考えると、後半で急に姦通物語が続き、難解な韻文を多用する内容になることにも納得がいく。『元宵鬧』第二十六折の元宵節の描写が目立つ戦の場面も、李素甫ではなく、別の人物によつて後半部に元宵節の華やかな描写が加えられた結果なのかもしれない。

おわりに

本論文では、南曲『元宵鬧傳奇』と『水滸傳』の描写を比較した上で、『元宵鬧傳奇』の前半と後半の作風には大きな変化があることを指摘し、そのような変化が生じた理由を考察した。また、『元宵鬧傳奇』の中で最も特徴的な張文遠の存在に注目し、張文遠の台詞が『水滸記』の影響を受けていることや、物語後半の難解な韻文、度重なる姦通劇が、作者李素甫以外の人物の手によるものである可能性について論じた。明代後期の南曲制作の手法・過程について研究を進めるにあたって、些かの参考となれば幸いである。

注

(1) 王国維『曲録』（『王国維文集』第二巻、中国文史出版社、一九九七年）には「一云、朱佐朝作」とあるが、何を典拠にしたものか不明である。

(2) 「李素甫」という名前は『列朝詩集』閩集卷五「周藩宗正中尉睦樺」に収録された朱睦樺（一五一七―一五八六）の二首の詩題に見える。

南曲『元宵鬧傳奇』と『水滸傳』

「汴上逢李東因寄李二素甫（汴上にて李東に逢ふ、因りて李二素甫に寄す）」詩

「吹臺上送李東還關中兼寄李素甫孝廉（吹臺上にて李東關中に還るを送る、兼ねて李素甫孝廉に寄す）」詩

朱陸禔は朱元璋の七世孫で、非常に多くの藏書を持ち、『寶劍記』の作者である李開先の著作も多数購入していた人物である。二首とも李東という人物に会うついでに詩を送っているところを見るに、李素甫も李東と同じく関中（山西・陝西省）に住む人物だろう。また、二首目の「孝廉」という語から、李素甫は郷試に合格した挙人であったことが分かる。

李孝廉と呼ばれ、朱陸禔と年代が近い人物に李結がいる。李結は戸部尚書などを務めた王承裕の門人であり、明の馮從吾による『少墟集』に「李孝廉結」と名が記されている（巻二十、關學編三）。李結も王承裕と同じく三原（陝西省）の人だったようで、嘉靖十六（一五三七）年に陝西で郷試に合格した記録が残っている。しかし、乾隆『三原縣志』によると李結は吳江からは遠く離れた筠連（現在の四川省宜賓市轄県）で知県になっており、仮に『元宵鬧』の作者だったとしても「吳江李素甫」と書くとは考えにくい。やはり朱陸禔と関わりがあった李素甫と『元宵鬧』の作者李素甫は別人の可能性が高いと思われる。

(3) 大木康「馮夢龍と明末俗文学」（汲古書院、二〇一八年）「馮夢龍傳略」参照。

(4) 『義俠記・翠屏山』の内容については、董康『曲海總目提要』（人民大学出版社、一九五九年）、青木正兒「支那近世戯曲史」（青木正兒全集）第三卷（春秋社、一九七二年）参照。

(5) 『京都府立大学学術報告 人文』第六十二号、二〇一〇年十二月。

(6) 命令を受けたのは石秀だが、第七折で実際に戦っているのは魯智深である。『水滸傳』第六十一回で盧俊義と戦っているのは魯智深であるため、『水滸傳』に影響されて魯智深と書いてしまったものと考えられる。第七折では小生が演じているのが張順ではなく柴進であるなど、単なる誤記か意図的なものか判別がつきにくい違いが存在する。

(7) 中鉢雅量『中国小説史研究——水滸伝を中心として——』（汲古書院、一九九六年）「水滸伝の成立過程」参照。

(8) 『六十種曲』第九卷（中華書局、一九五八年）。

(9) 『和漢語文研究』第十一号、京都府立大学国文学会、二〇一三年。